

第三章 浮舟と薫の物語 薫と浮舟、宇治橋の和歌を詠み交す

[第一段 匂宮、二条院に帰邸し、中君を責める]

*二条の院におはしまし着きて(宮は二条院にお着きになって)、女君のいと心憂かりし御もの隠しもつらければ(夫人の御方が実に頑強に常陸姫のことを隠し立てしていた事が不満で)、*心やすき方に大殿籠もりぬるに(気楽な自室でお休みになったが)、寝られたまはず(寝付けなされず)、いと寂しきに(とても寂しくて)、もの思ひまされば(気分が落ち込むので)、心弱く*対に渡りたまひぬ(我を張り切れず西の対に出向きなさいました)。何心もなく、いときよげにておはす(御方夫人は普通に、とてもさっぱりした表情でいらっしゃいます)。*「二条の院」に帰るのは、やはり六条院よりは気楽だからなのだろう。それに、若君が出来てからは、若君に会うという事が理由立てに出来るので、源氏大臣家も文句を言い難いのだろう。*「心やすき方」は注に<自分の部屋。寝殿にある。>とある。*「対」は注に<西の対。中君の部屋。>とある。因みに、紫君も二条院では西の対を居室にしていたが、光君は当時は寝殿ではなく東の対を自室にしていた。

めづらしくをかしと見たまひし人よりも(一際可愛いとお思いになった宇治の常陸姫よりも)、「またこれはなほありがたきさまはしたまへりかし(また是はいっそう得難い美しさではいらっしやるものだ)」と見たまふものから(と三の宮は御方を御覧になるものの)、いとよく似たるを思ひ出でたまふも(とても良く似ている姫の面影を思い出しなさっては)、胸塞がれば(愛しさに胸がいっぱいになって)、いたくもの思したるさまにて(姫との逢瀬が困難な事情に、深く思い沈みなさる様子で)、御帳に入りて大殿籠もる(御寝台に入ってお休みになります)。女君も率て入りきこえたまひて(宮は夫人も御寝台にお連れ入れ申しなさって)、

「心地こそいと悪しけれ(気分がとても悪い)。いかならむとするにかと、心細くなむある(どうなるのかと不安だ)。まろは(このまま私が死んだら)、いみじくあはれと*見置いたてまつるとも(何と不憫かと私は残されるあなたを案じ申しますが)、*御ありさまはいととく変はりなむかし(あなたの御身上はよほど早く変わってしまうんでしょうか)。人の本意は、かならずかなふなれば(人の一念は通じますからね)」*「見置く」は<相手を後に残すことを考える→自分の死後の相手の生活を案じる>。「みおく」の三音でずいぶん深い思いを表現するものと妙に感心する。*「おおんありさま」は<御方の事情、立場、身分>などで、それが夫との死別で「変はりなむ」のは客観的事実だが、此处では「いと疾し」の形容句が文意を決定しているようだ。注には<『完訳』は「薫と結婚するか、いやみに言う」と注す。>とある。

とのたまふ(と仰います)。「けしからぬことをも(とんでもないことを)、まめやかにさへのたまふかな(真顔で仰って)」と思ひて(と御方夫人は思って)、

「かう聞きにくきことの漏りて聞こえたらば(そのように御疑いとの外聞の悪い話が他へ洩れ出たら)、いかやうに聞こえなしたるにかと(私が宮様に一体何を申したのかと)、人も思ひ寄りたまはむこそ(大将殿も気に為さるのが)、あさましけれ(情けない)。心憂き身には(身寄りの無い心細い私には)、すずろなることもいと苦しく(冗談でも辛いです)」

とて、背きたまへり(と言って背を向けなさいました)。宮も、まめだちたまひて(宮も真に受けなさって)、

「*まことにつらしと思ひきこゆることもあらむは(本当にあなたが私より大将を大事に思っ
ていらっしゃるのではないかと辛く思い申さずにはいられないこともあるのを)、いかが思さるべ
き(如何お考えなのですか)。まろは、御ためにおろかなる人かは(私はあなたにとって大将以下
の男なのか)。人も、ありがたしなど(女房たちもあなたと大将の仲を普通ではないと)、とがむ
るまでこそあれ(疑っているほどです)。人にはこよなう思ひ落としたまふべかめり(あなたは私
を大将よりずいぶん下に思っ
ていらっしゃるらしい)。*誰れもさべきにこそはと(私たちは互いに縁がある関係と)、ことわらるるを(判っているが)、*隔てたまふ御心の深きなむ(何か隠しご
とをしていらっしゃる御二人の仲の深さが)、いと心憂き(とても嫌です)」 *「まことにつらしと思
ひきこゆること」とは「女君のいと心憂かりし御もの隠し」を恨んで言っていることではあるらしいが、宮がその事を
恨む根っ子は大将への嫉妬ではあるらしく、また昨日の今日で、この時点では姫を寝取った後ろめたさも宮には強
くあるようなので、宮は自身の宇治行きは明かさずに御方に不満をぶつけたいらしく、このように曖昧な言い方で
大将と御方との仲を疑うような言い方をしているようなので、此処は曖昧なまま言い換える事が肝心らしい。 *「た
れもさべきにこそはとことわらるる」は何か下敷きがある言い方なのではないか、と思うが、何の注釈も無い。で、
是だけでは文意の特定が非常に困難だ。それでも慣用句解釈からか、「さべきにこそ」は<決まった宿命=運命>と
訳文にあり、私も他に思い当たることも無いので、一応は従って置く。となると、「たれもさべきにこそはとことわ
らるる」は<各自が運命を了解する→それが抗えない運命と知る>みたいな言い方になるのだろうか。「たれも」は良
く分からないが、宮と大将と御方との関係は、そもそもの経緯からして初めから相互に親しいので、「運命」が<今
さら余所余所しくは出来ない>ということだとすれば、この「誰も」は<私たちは互いに>という言い方になる。し
かし、そういう文意なら、他にもっと簡素な言い方がありそうに思えてならないが、他の文意も思い付かないので、
今の所左様に解して置く。 *「隔てたまふ御心の深き」も曖昧な言い方を態としているのだから分かり難いが、
「へだつ」は<遠ざける>だから結果として<隠す>と同義で、しかしそれは決して常陸姫の隠し立てを匂宮として
は意図していないので、恐らく是は、故姉君が妹君を置き去りにして薫君と御方が一夜を明かしたことを、を御方も
薫君も匂宮には秘密にしているだろうから、宮としては二人の間に何か隠し事があるとは以前から感付いていて、
そのことをずっと根に持っている、ということをお方も察知する、ような言い方なのだろう。

とのたまふにも(と仰るにつけても)、「宿世のおろかならで(縁が深いから)、尋ね寄りたるぞ
かし(捜し出せたのだ)」と思し出づるに(と宇治の常陸姫が思い出しなされて)、涙ぐまれぬ(涙
ぐまれました)。まめやかなるを(このように宮が本気で恨み言を仰るのを)、「いとほしう(何か
あったらしい)、*いかやうなることを聞きたまへるならむ(一体何をお聞き知りになったのか)」
と驚かるるに(と御方は動揺して)、いらへきこえたまはむ言もなし(お応え申す言葉もありません)。

「*ものはかなきさまにて見そめたまひしに(宮は私を大将との謀で容易くお抱きになったの
で)、*何ごとをも軽らかに推し量りたまふにこそはあらめ(大将と私との仲も何でも酔狂事
のようにお考えなのだろう)。*すずろなる人を*しるべにて(夫でもない大将に、宮様が源氏六姫と正
婚なされた時の心細さを相談申して)、その心寄せを思ひ知り始めなどしたる過ちばかりに(大将
の好意を思い知り始めたことになった軽率さがあつたばかりに)、おぼえ劣る身にこそ(このよう
に責められることになったのだ)」と思し続けるも(と考え続けなされるにも)、よろづ悲しくて(後

ろ盾のない身が、何につけても情けなく)、いとどらうたげなる御けはひなり(いっそうか弱そうな御方の御様子です)。 *「ものはかなきさまにて」は注にく以下「おぼえ劣る身にこそ」まで、中君の心中の思い。匂宮との結婚が正式な結婚でなかったことを思う。 >とある。此处は曖昧な言い回しで話を進めて、それぞれの思惑の動きを読ませる場面らしく、分かりにくい語用が続いて難儀する。で、この「ものはかなきさま」は<計略に掛かって簡単に抱かれた>という宮との最初の共寝のことを言っているらしいが、その計略に弁を初め山荘の女房たちが協力したのは、何と言っても相手の男が三の宮と源氏御曹司という飛びっきりの貴公子たちだったからで、騙し討ちみたいだったからと自分を憐れむのは、平民には自慢話にしか聞こえない、その恵まれた境遇の客観的価値を認知し得ないお姫様の戯言だ。 *「何ごとをも」は<薫大将と御方との関係の一切>ということらしい。 *「すずろなるひと」は<関係ない人=第三者>という慣用語のようで、此处で言う第三者とは<夫でもない大将>のことらしい。 *「しるべ」は「知る辺、標、導」であり、是は二年前の八月に匂宮が源氏六姫と正婚した際に、御方が心細さから薫君に宇治への送りを相談したこと(宿木巻四章)を言っているのだろう。そして、その時に薫君が妙に積極的且つ大胆に御方に迫り、御方の腹帯を見て薫君は本番を思い止まったようだが、まだ妊娠4~5ヶ月で傍目には然程目立たない御方の腹ぼてを知るほどに薫君は近接したということではあり、そのように薫君に付け入る隙を与えてしまった軽率さを御方は後悔したようで、まして出産後に宮が若君を可愛がるほど、この安泰を守りたいと御方は切望したのだろうし、だからこそ出過ぎた取り成しとは思いつつも常陸姫の存在を薫君に伝えた、というのがおよその経緯。で、御方は正にこの経緯を悔やんでいる、ということなのだろう。

「かの人見つけたることは(常陸姫を見つけたことは)、しばし知らせたてまつらじ(しばらくお知らせ申すまい)」と思せば(と宮は宇治へ出掛けて姫を寝取ったことを御方には内緒にしておこうとお思いになって)、*異ざまに思はせて怨みたまふを(御方には別のことと勘違いさせて悪態をつきなさるのを)、ただ(御方は他ならず)「この大将の御ことをまめまめしくのたまふ(あの時の大将の御近付きを本気で疑っていらっしゃる)」と思すに(とお思いになって)、「人や虚言をたしかなるやうに聞こえたらむ(女房の誰かが嘘を本当のように告げ口したのでらう)」など思す(とお考えになります)。ありやなしやを聞かぬ間は(しかし宮の仰り方は曖昧なので、そういう事なのかどうかを確かに聞かない内は)、*見えたてまつらむも恥づかし(言い訳を申し上げることも憚られます)。 *「異ざまに思はせて怨みたまふ」ということは、何のことはない、宮は御乱行の後ろめたさから照れ隠しに御方を責めたらしく、とは言え、宮には大将への嫉妬やら対抗心はあるようだから、まんざら御門違いのトバッチリでもなく、それだけに始末が悪いのかもしれないが、少なくとも、今この時点で、御方が然程には落ち込む必要はなさそうで、何より、宮の悪態を真に受けることはないのだろう。ただ、正月の飾り物を常陸姫が若宮に贈って来たことで、宮が去年の八月に見掛けた女が宇治に居るらしいと気付いた、ということは御方も承知している(一章五段)ので、宮と常陸姫が接遇する前に大将は常陸姫を他所へ移した方が良く、くらいの危惧は御方も覚えていただろう。それがまさか、その女は大将によって宇治へ移されていて、ということは当然に大将の女で、その女が御方とも何らかの縁者らしい常陸姫だ、という事情まで宮が既に知っていて、それどころか、既にその常陸姫を寝取ってしまっている、などとは御方には到底思い及ぶ筈がない、ということか。御方にしたらミステリー、匂宮にとってはサスペンス、みたいな話だろうか。とにかく、分かり難い。 *「見ゆ」は<見せる→示す→説明する→申し開く→言い訳する>という語用に読んで置く。

[第二段 明石中宮からと薫の見舞い]

内裏より大宮の御文あるに(御所から母宮の御手紙があるとの知らせに)、驚きたまひて(匂宮は驚きなさって)、なほ心解けぬ御けしきにて(まだ不満そうな御様子のまま)、あなたに渡りたまひぬ(寝殿の自室に戻りなさいました)。

「昨日のおぼつかなさを(昨日は御不在で心配しました)。悩ましく思されたなる(急な東山詣とは、何処かお悪いのですか)、よろしくは参りたまへ(大丈夫なら参内して顔を見せてください)。久しうもなりにけるを(暫く会っていませんから)」

などやうに聞こえたまへれば(などという御文面で)、騒がれたてまつらむも苦しけれど(御心配頂くのも恐縮だが)、まことに御心地も違ひたるやうにて(今日は本当に急ぎの朝帰りで疲れもあったので)、その日は参りたまはず(参内なさいません)。上達部など(高官たちが)、あまた参りたまへど(多数見舞いに参じなさったが)、御簾の内にて暮らしたまふ(宮は直面を面倒がって、御簾内のままで応対して過ごしなさいます)。

夕つ方、右大将参りたまへり(夕方に薫大将が御見舞に参上なさいました)。

「こなたにを(御簾内へ)」

とて(と宮は薫殿を部屋へ通して)、うちとけながら対面したまへり(親しく対面なさいました)。

「悩ましげにおはします(御不調そうでいらっしゃる)、とはべりつれば(という使者の話でしたので)、宮にもいとおぼつかなく思し召してなむ(中宮に於かれましても大変御心配あそばしておいでです)。いかやうなる御悩みにか(何処がお悪いのですか)」

と聞こえたまふ(と大将はお聞きなさいます)。見るからに(宮は大将を一目見て)、御心騒ぎのいとどまされば(寝取った女の夫と思えば、胸騒ぎがいつそう増して)、言少なにて(短い返事で言葉を濁して)、「聖だつと言ひながら(熱心な仏心修行の山寺通いというものの)、こよなかりける山伏心かな(この大将はとんだ山伏だな)。さばかりあはれなる人を、さて置きて(その実、あんな好い女を囲って)、心のどかに月日を待ちわびさすらむよ(呑気に何日も待ち暮らさせているんだから)」と思す(とお思いになります)。

例は、さしもあらぬことのついでにだに(宮は普段から、何も殊更言わなくても良い時でさえ)、我はまめ人ともてなし名のりたまふを(自分は堅物だからと大将が振る舞い自称なざるのを)、ねたがりたまひて(取り澄ました気取り屋と悔しがりなさって)、よろづにのたまひ破るを(何かとケチをつけて反論なざるので)、かかること見表はいたるを(この隠し女を見破ったからは)、いかにのたまはまし(どんなにか言い負かしなさりたかったか)。されど(しかし今は宮も)、さやうの戯れ事もかけたまはず(そのような戯れ言も仰らず)、いと苦しげに見えたまへば(とても疲れて見え為さるので)、

「不便なるわざかな(よくありませんね)。おどろおどろしからぬ御心地の(ひどくお悪くなくても)、さすがに日数経るは(あまり長引くと)、いと悪しきわざにはべり(地力が衰えます)。御風邪よくつくろはせたまへ(お熱は十分お下げなさいませ)」

など、まめやかに聞こえおきて出でたまひぬ(などと大将は親身に御見舞を申してお帰りになりました)。「恥づかしげなる人なりかし(大将はちゃんとしているなあ)。わがありさまを(私のことを)、*いかに思ひ比べけむ(あの姫はどんな風に大将と見比べているのだろう)」など、さまざまなることにつけつつも(など何につけても)、ただこの人を、時の間忘れず思し出づ(宮は直ぐに常陸姫のことを間断なく思い出さいます)。 *「いかに思ひ比べけむ」は注に<主語は浮舟。>とある。確かに此処の主語は分かり難い。

かしこには(宇治山荘では)、石山も停まりて(石山詣でも中止になって)、いとつれづれなり(実に手持ち無沙汰です)。御文には(宮の後朝の御手紙には)、いといみじきことを書き集めたまひて遣はす(それはもうどんなに恋しいか言葉を尽くしなさって送ります)。*それだに心やすからず(その手紙を送るのでさえ宮は偽大将が露見するのが心配で)、「時方」と召しし*大夫の従者の(時方とお呼びになっていた五位蔵人の付き人に)、心も知らぬしてなむやりける(姫への御手紙ではないように見せかけて届けさせます)。 *「それだに心やすからず」の文意が取れない。というのも、下文の「大夫の従者の心も知らぬしてなむやりける」の文意も取れないからだ。しかし、段末が「よろづ右近ぞ虚言しならひける」と結ばれていて、この匂宮の寝取り事件は、差し当たっては、姫の他には右近一人が関与して秘事にして置く、という前提に立って語られていそうなので、だとすれば、この「心やすからず」は<秘事の露見を案じる>のだろうし、「心も知らぬしてなむ」は<他の女房に事情を悟られないように→それと知られないように>という言い方になりそう。今の所、他の解釈が成立しないので左様に解す。が、もしそうだとしたら、この書き方は舌足らずどころではない不的確なもので、稚拙に過ぎる。 *「たいふのずさ」と使者を説明することで、下の「心も知らぬしてなむやりける」がこの御文を宮から姫への手紙ではなく、時方から右近への手紙のように見せかけた、という文意になる言い回しになっている、のだろうか。非常に分かり難いが、当時の世情からすれば、それが普通の言い方だった、のかもしれない。

「右近が古く知れりける人の(私の古い知人が)、殿の御供にて尋ね出でたる(殿の御供に来ていて私を見つけて)、*さらがへりてねむごろがる(繕りを戻そうと言い寄って来たのです)」 *「さらがへりてねむごろがる」とあるが、時方が右近に嫌に馴れ馴れしい態度を取っていたのは、是を言う複線だったのだろうか。

と(と右近は宮の御手紙のことを)、友達には言ひ聞かせたり(女房仲間には言い聞かせていました)。よろづ右近ぞ(とかく右近は)、虚言しならひける(このことでは嘘を吐き慣れていました)。

[第三段 二月上旬、薫、宇治へ行く]

月も*たちぬ(二月になりました)。かう*思し知らるれど(宮は姫を恋しく身に沁みてお思いになるが)、おはしますことはいとわりなし(宇治へお出掛けなさることは出来ません)。「かうのみものを思はば(こんなに思い詰めていたら)、さらにえながらふまじき身なめり(死んでしまおうだ)」と、心細さを添へて嘆きたまふ(と食欲も出ずに思い沈みなさいませ)。 *「立つ」は<始

まる>という語用で、「月もたちぬ」は<新月が始まった=二月になった>ということらしい。*「思ひ知る」は<身に沁みて感じる>と古語辞典にある。

大将殿、すこしのどかになりぬるころ(大将殿は正月行事が過ぎて、少し公務が閑になった頃)、例の、忍びておはしたり(例によって目立たぬように宇治にお出掛けになりました)。寺に仏など拝みたまふ(山寺で仏像を拝みなさいます)。御誦経せさせたまふ僧に(読経を上げさせなされる僧に)、物賜ひなどして(お布施をして)、夕つ方、ここには忍びたれど(夕方になって山荘にお訪れたが)、*これはわりなくもやつしたまはず(此方は兵部卿のようには無闇に狩衣装束のやつれ姿などなさいません)。烏帽子直衣の姿(略礼装のまま)、いとあらまほしくきよげにて(大将らしく麗然として)、歩み入りたまふより(姫の御部屋にお入りになって着座なされる御姿は)、恥づかしげに(格式高く)、用意ことなり(隙の無い所作です)。*「これは」は注に<薫。匂宮のやつし姿に対していう。>とある。従って補語する。

女(姫はお相手する女として)、いかで見えたてまつらむとすらむと(兵部卿の愛にも応えた身として、大将に如何顔向けできたものかと)、空さへ恥づかしく恐ろしきに(如何取り繕うと、天は御見通しだと自責の念に駆られて)、あながちなりし人の御ありさま(情熱的だった兵部卿の御姿が)、うち思ひ出でらるるに(思い出される)、また(一方でまた)、この人に見えたてまつらむを思ひやるなむ(大将に抱かれ申すことを思うと)、いみじう心憂き(どちらにも裏切るようで、とても辛いのです)。

「『われは年ごろ見る人をも(私は年来愛して来た女たちも)、皆思ひ変はりぬべき心地なむする(皆忘れてしまいそうな気がする)』とのたまひしを(と兵部卿が寝物語に仰ったのを)、*げに(その御言葉どおりに)、そののち御心地苦しとて(それ以降ご体調が悪いという事で)、いづくにもいづくにも(どちらの女のところへも)、例の御ありさまならで(以前のようにお通いなさらず)、御修法など騒ぐなるを聞くに(平癒の祈禱を上げなさっていると聞いているので)、また(此处でまた私が大将に抱かれるのを)、いかに聞きて思さむ(宮様は如何お聞き思いなさるだろう)」と思ふもいと苦し(と思うと常陸姫は心苦しいのです)。*「げに」は注に<浮舟の納得の気持ち。『完訳』は「匂宮は病氣と騒がれたが、中の君にも六の君にも会わぬと噂が宇治に伝わる。それを根拠に宮の言葉に「げに」と納得」と注す。>とある。

この人はた(大将はと言うと)、いとけはひことに、心深く(それはもう漂う雰囲気は殊に奥ゆかしく)、なまめかしきさまして(優美な物腰で)、久しかりつるほどのおこたりなどのたまふも(久しい無沙汰の言い訳を仰るのも)、言多からず(言葉少なく)、恋し愛しとおり立たねど(恋しい愛しいと言って迫ることはないが)、常にあひ見ぬ恋の苦しさを(なかなか会えない恋の苦しさを)、*さまよきほどにうちのたまへる(季節の風雅につけて思い出すように仰って)、いみじく言ふにはまさりて(その情趣が直情のままを安易に言う表現に増さって)、いとあはれと人の思ひぬべきさまを*しめたまへる人柄なり(とても印象深く姫の寂しさをしみじみと慰めなされる人当たりです)。艶なる方はさるものにて(優雅さは言うまでも無く)、行く末長く人の頼みぬべき心ばへなど(行く末永く信頼申せそうな性格は)、こよなくまさりたまへり(大将が兵部卿よりはるかに勝っていらっしやいました)。*「さまよきほど」は<ちょうど良い具合>だろうが、その具体的な内容が分からない。で、和歌に気持を込める情緒みたいなことぐらいいいか思いつかないので、左様に言い換えて置く。し

かし、それならこの作者の専門分野のようでもあり、実際に歌を用意しても良さそうな気もして、如何してこんな言い方をするのか釈然としない。*「しめたまふ」の「しむ」は下二段活用の「占む」で<持っていらっしやる>という語用のように小学館の古語辞典には用例引用がある。が、「しむ」は「染む」の他動詞も下二段活用とされていて、動詞対象が「人の思ひぬべきさまを(待つ身の女の寂しさを)」と他者に作用する構文となっていることからしても、この「しめたまふ」は「染め給う(しみじみさせなさる)」と読みたい。

「*思はずなるさまの*心ばへなど(意外な兵部卿との仲の成り行きを)、漏り聞かせたらむ時も(大将が漏れ聞きなさったら)、なのめならずいみじくこそあべけれ(大変なことになるだろう)。あやしううつし心もなう思し焦らるる人を(狂おしく常軌を逸して恋焦がれなさる兵部卿を)、あはれと思ふも(冥利に思うのも)、それはいとあるまじく軽きことぞかし(それはとんでもなく軽率な考えで)。この人に憂しと思はれて(そんなことを思っていたら、この大将に私は嫌われて)、忘れたまひなむ(この人は私を忘れてしまいなさるだろう)」心細さは(と思う姫の心細さは)、いと深うしみにければ(本当に深刻で)、思ひ乱れたるけしきを(思い悩んでいる様子なのを)、「月ごろに(この数ヶ月で)、こよなうものの心知り(ずいぶんと男女の情が分かり)、ねびまさりにけり(大人になった)。つれづれなる住み処のほどに(物寂しい山荘暮らしなので)、*思ひ残すことはあらかし(他に考えることもないのだろう)」と見たまふも(と御覧になるのも)、心苦しければ(大将は自分の無沙汰の所為かと、自責されて)、常よりも心とどめて語らひたまふ(いつもよりも姫を気遣って喜ばせるお話しをなさいます)。*「思はずなるさま」の主語は内心文ながら話者である常陸姫。で、姫にとって<意外だったこと=宮の乱入>だが、その宮に自分の気持ちが靡くことも姫には<意外>だったのだろう。だから、その後の今に至る経緯を「心ばへ」などという言い方にするのだろう。*「こころばへ」の「心」は<事情>で、「ばへ」は「延へ」で<動向、進展>で、「心延へ」は<成り行き具合>だが、「心映へ」の洒落語用でもありそうだ。*「思ひ残すこと」は現代語では<未練、心残り>だが、古語では他の語用もありそうだ。少なくとも、此处では<心残り>では文意が通らない。姫は「(心細さはいと深うしみにければ)思ひ乱れたるけしき」なので、ざっと<力なく寂しそう>に見えたはずだ。で、そうなる原因を大将は「(つれづれなる住み処のほどに)思ひ残すことはあらかし」と推察したのだから、恐らく是は<姫はきっと気晴らしになる楽しみが何も無かったんだろうなあ>みたいなことを言っている可能性が高い。で、そういう筋をこの「思ひ残すことはあらかし」という言い方に当てはめて見ると、「あらかし」は<無かったんだろうなあ>に置換出来そうなので、「思ひ残すこと」は<楽しみ>になりそうだ。が、さすがに<「思ひ残すこと」=楽しみ>は成立しない。で、此处で言う「思ひ」は何かと言うと<つれづれなる=眺め=長め=物思い>だろうから、「残すこと」が何とか<楽しみ>に同価する理屈が立てば良さそうで、それは即ち<楽しみ≠物思い=「思ひ」≠「残すこと」=「思ひ」以外>と語用すれば成立する。つまり、「思ひ残すこと」は<他の考え>だ。

[第四段 薫と浮舟、それぞれの思い]

「造らす所(京に造らせているあなたの新居は)、やうやうよろしうしなしてけり(だいぶ出来上がってきました)。一日なむ、見しかば(先日、見て来ましたが)、ここよりは気近き水に(宇治川よりは親しめる曲水と)、花も見たまひつべし(桜も御覧になれます)。三条の宮も近きほどなり(本邸の三条宮邸からも近いところです)。明け暮れおぼつかなき隔ても(其処へ移りなされば、直ぐには会えない遠さでも)、おのづからあるまじきを(なくなりますからね)、この春のほどに(この春の内には)、さりぬべくは渡してむ(そのようにしてあげよう)」

と思ひてのたまふも(と大将が氣遣つて仰るにつけても)、「かの人(兵部卿が)、のどかなるべき所思ひまうけたりと(隠れ住める所に心当たりがあると)、昨日ものたまへりしを(昨日の御手紙にもあったのを)、かかることも知らず(此方ではこういう話になっているのも知らずに)、さ思すらむよ(そんなことをお考えになっている)」と、あはれながらも(と姫は宮が愛しく思われるものの)、「そなたになびくべきにはあらずかし(宮に靡いてはいけない)」と思ふからに(と思うので)、ありし御さまの、面影におぼゆれば(その御姿が目には浮かんで)、我ながらも、うたて心憂の身や(どちらにも操を立てられないとは、我ながら情けない女の性だ)と、思ひ續けて泣きぬ(と思ひ續けて泣きます)。

「御心ばへの(あなたの氣立てが)、かからでおいらかなりしこそ(このように氣弱でなく、おっとりしていれば)、のどかにうれしかりしか(ゆっくり出来て嬉しいのだが)。人のいかに聞こえ知らせたることかある(誰かが何かあなたを不安がらせることを吹聴したのだろうか)。すこしもおろかならむ心ざしにては(少しでもあなたを軽く考えていたら)、かうまで参り来べき身のほど(此処まで通い来る身分の私でも)、道のありさまにもあらぬを(道の近さでも無いものを)」

など(などと大将は)、朔日ごろの(ついたちごろの、二月初旬の)夕月夜に(ゆふづくよに、ほの暗い月夜に)、すこし端近く臥して眺め出だしたまへり(少し縁側近くに身を横たえて庭を眺めていらっしやいました)。男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で(男は故姉君を偲びなさり)、女は、今より添ひたる身の憂さを嘆き加へて(女は今後の苦悩を思い遣り)、かたみにもの思はし(それぞれ思ひはすれ違ひながら、互いに物思ひがちです)。

[第五段 薫と浮舟、宇治橋の和歌を詠み交す]

*山の方は霞隔てて(山波は霞たち)、寒き洲崎に立てる*鶺鴒の姿も(寒空の川っ淵に立っているサギの姿も)、所からはいとをかしう見ゆるに(宇治の風情としては味わい深く)、宇治橋のはるばると見わたさるに(宇治橋が長く掛かっているあたりを)、柴積み舟の所々に行きちがひたるなど(柴積み舟が幾つか行き違ふのは)、他に目馴れぬことどものみとり集めたる所なれば(他では見慣れないことばかりを取り集めた此処ならではの景色なので)、見たまふたびごとに(大将は御覧になる度に)、なほそのかみのことのただ今の心地して(今もなお姉君が存命中の事が今のこのように思えて)、いとかからぬ人を見交はしたらむだに(特に縁戚関係のない女を相手になさったとしても)、めづらしき仲のあはれ多かるべきほどなり(深い恋中になる感傷に陥り易いこの宇治山荘の情趣です)。*「やまのかたはかすみへだてて」は注に<以下の景色について、『異本紫明抄』は「蒼茫たる霧雨の霽の初めに寒汀に驚立てり重疊せる煙嵐の断えたる処に晩寺に僧帰る」(和漢朗詠集、僧)を指摘。>とある。出典参照には「蒼茫霧雨之霽初 寒汀驚立 重疊煙嵐之断処 晩寺僧帰」(和漢朗詠集下-六〇四 張説)と紹介されている。「寒汀驚立(かんでいろりゅう、かんでいにさぎたてり)」は高野川のアオサギが写真をアップされているブログもあったが、正に「寒き洲崎に立てる鶺鴒の姿」だ。*「鶺鴒」は「かささぎ」と読みがある。が、「カササギ」はくカラス科の鳥。全長約45センチ。尾が長く、肩と腹が白く、ほかは緑色光沢のある黒色。雑食性。ユーラシア大陸と北アメリカ西部に分布。日本では佐賀平野を中心に九州北西部にだけみられ、人里近くにすむ。天然記念物。かちがらす。朝鮮鳥。高麗鳥。《季秋》>と大辞泉にあり、今のカササギが此処で言う「鶺鴒」でないことは確かだ。大辞林には「鶺鴒」について<サギの一種。今のアオサギのことか。>ともあるが、その用例に当文が引かれているので、此処では後付でしかない。で、アオサギは普通「青鷺」と漢字表記されるが、大辞泉にはくサギ科の鳥。

全長約 95 センチ。背面が青灰色、目の後方と冠羽が黒い。水田や湖沼で魚・ザリガニ・カエルなどを食べ、木の上に巣をつくる。《季 夏》>とあり、この水鳥の実態がこの「鶺鴒」に近そうだ。生物分類と漢字表記の歴史的な相違があるのだろうか。まあ、サギ(鷺)と見て置きたい。

まいて(ましてこの常陸姫は)、恋しき人によそへられたるもこよなからず(恋しい故姉君に似ているのもこの上なく)、やうやうものの心知り(次第に男女の情も分かって)、都馴れゆくありさまのをかしきも(都風になってゆくさまの風情も)、こよなく見まさりしたる心地したまふに(ずいぶん良くなって来た気がなさって)、女は(しかし女はその実)、かき集めたる心のうちに(大将と兵部卿の愛を受け止める心の重圧に)、催さるる涙(耐え切れずに込み上げる涙が)、ともすれば出でたつを(ふと流れるのを)、慰めかねたまひつつ(大将は慰め為さるのに手こずって)、

「宇治橋の長き契りは朽ちせじを、危ぶむ方に心騒ぐな (和歌 51-06)

「宇治橋の 長さに掛けて 大丈夫 (意識 51-06)

*「うぢばしの」は「長き」を言い出すためだけの枕語用で、寒々しい宇治川の風情も薫殿にとっては恋の情緒らしく、呑気に楽しく詠んだ歌なのだろう。薫大将は常陸姫が兵部卿によって女の性を開発されたことに気付かず、また、薫殿にはその手の性戯に凝る性癖は無いのか、観察眼が鈍いのかも知れず、だから慰めると言っても、相変わらず姫を何処か子ども扱いしているような読みっぷり、に私には見える。

今見たまひてむ(もう直ぐ引越し出来なさいますから)」

とのたまふ(と仰います)。

「絶え間のみ世には危ふき宇治橋を、朽ちせぬものとなほ頼めとや」(和歌 51-07)

「宇治橋は 朽ちる間も無く 流される」(意識 51-07)

*「絶え間」は<通いの途絶え>だろうが、宇治橋については川の氾濫による決壊や戦乱時での破壊などで物理的に橋の通行が<途絶えた期間>でもあるらしい。今年(2013年9月)の台風による増水でも宇治橋が冠水直前になったニュース映像を見たし、今の宇治橋はコンクリート製で頑丈らしいが、それでも土石流には耐えられないし、宇治川で土石流は無いにしても、木製だったら、そりゃ何度も壊れたんだらうな、と改めて思わされた。そんな宇治橋を、長くて立派だから大丈夫、なんて言う呑気な薫殿に、兵部卿との板ばさみで苦しむ常陸姫は呆れ気味に、朽ちるところか、何時落ちるか心配だと大将の<途絶え>の罪深さを嘆いてもいるし、泣きながら非難もしているのだろう。が、大将にはそれも<可愛いおねだり>くらいにしか思えない。薫殿はまさか姫が、兵部卿に寝取られているなどは全く気付いていない。ただ、気付いたら、それぞれに重たい話で、事態は既に相当に面倒だ。各人の設定はだいぶ異なるが、この三人の関係は、一世代半前当時の頭の中將と常夏=夕顔と光君の関係に似た、薫殿と常陸姫と匂宮の立ち位置だ。まさか、常陸姫の血筋まで夕顔に近かったりするんだらうか。其処まで来ると、怪奇物語の様相さえ漂う。が、それだけに有りそうな気もする。

さきざきよりもいと見捨てがたく(薫殿は姫が以前よりもずっと魅力的に見えて)、しばしも立ちとまらまほしく思さるれど(暫く逗留したくお思いになるが)、人のもの言ひのやすからぬに

(大将の重責にある者が帝の側を不用意に離れるなど、宮中での不評を買うので)、「今さらなり(今になっての気ままな振る舞いは大人気ない)。心やすきさまにてこそ(姫を京に移し申せば、気軽に会えるのだから)」など思しなして(などと思い直しなさって)、暁に帰りたまひぬ(夜明け前にお帰りになりました)。「いとようもおとなびたりつるかな(しかしずいぶん大人びたものだ)」と、心苦しく思し出づること(と姫を寂しがらせるのが気懸かりに思い出されることは)、ありしにまさりけり(今までよりも強くなりました)。